

No.103 リカ・ムータル 「地中から世界へ」

Lika Mutal

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年8月15日付 立川市市報記事より

リカ・ムータルはオランダの女性作家で、現在はペルーのリマで仕事をしている。石彫の作家は石を選ぶ。日本人でもイタリアの大理石を求めて彼地で仕事をしているアーティストもいるし、現在ではアイルランドやブラジルなども人気のある産地だ。リカもそんなわけでペルーをベースにしているが、時によってはアメリカで石を探したりする。石はブロンズのように、思うままのかたちに見えるわけではない。石の特質やその成育をみて、石の中から石の声を聞き、そこに作家の想像力がかかわるのだ。ファーレ立川の作品はそんな過程の中でつくられたデリケートで技術の高い作品である。この(平成9年)7月オープンの横浜クイーンズスクエアにも新作が設置されている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団(現:UR都市機構)「ミニ通信」より

去年日本を旅し、自然空間や建築において伝統的な日本にも近代的な日本にもみられる非常に洗練された空間の使い方や、これらの微妙な互いへの影響の仕方を自ら体験する機会に恵まれるまでは、ファーレ立川プロジェクトへの参加は私にとって、どこか抽象的なものでした。この旅行の後、プロジェクトに参加する可能性は現実的な形をとり、石の彫刻家である私の中で、石を瞑想の対象とする文化とより緊密に結びつきたいという欲望が大きくなっていきました。

ファーレ立川プロジェクトの特別な点は、そこに美術の自治の中心の場があるという事です。通常、都市計画では建築予算の1パーセントがアートデザインや数点の美術作品に充てられています。最もパブリックなスペースである街路に、非常に多くの美術作品を設置するというのは、新しく大胆な考えです。

作品の形式の多くは1対1のヒューマン・スケールですので、見る側と彫刻の間に1対1の関係を喚起することになります。日常の街路の雰囲気は、いつもとは違う経験、つまり通過点でありながら、家庭や美術館のような“とどまるための場所”が持つ永続性を獲得した場所へと変わります。

人々は、多様な性質の強烈な美術体験に遭遇するのです。それは同時に、人々に注意深さと信頼の態度を要求します。

私は花崗岩の彫刻“地中から世界へ”を提案しました。

石の上部は、鎖の輪の形をしています。

全体が完成した段階で、私は石の下部を割りました。そのため、石は鎖の輪によってのみつなぎ合わされています。

石を割るのは輪を作るゆっくりした作業とは対照的に、非常に速く進行しました。

作業の最終段階で石を割るのは、それだけ危険が伴います。このため作業の最後の瞬間まで緊張感が持続し、石割は作業プロセスの不可欠の一部となります。

この彫刻は、“統一”、外観は分裂していても、万物の中にある“統一”という基本的原理を意味しています。